

---

# 虚闇幻想郷

風上都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虚闇幻想郷

### 【ZPDF】

Z7315F

### 【作者名】

風上都

### 【あらすじ】

つりやみのながれるそのなかで、『ぼく』ははじまつたの。

## 一節 「やの」「なまえ」「を」「つづる」

「あめ。かぜ。くも。ひかり。つき。・・・。きみのなまえはなあに  
？」

それでは皆様、始めよつ。

黒くて深い、やさしい虚闇の物語を。

虚闇幻想郷 一節  
「その」「なまえ」「を」「つづる」

『彼』に意識が芽生えたとき、辺りは一面のウロヤミでした。

踏み締めた足の裏には大地の感触。

澄ませた耳には風のそよぎと鳥の声。

凝らした眼には真つ黒で真つ黒なウロヤミと、当たり前のよつに広がる草や樹やイキモノたちのカタチ。

伸ばし広げた手には五本の指と、掴みどころのないスカスカとした二力の感触。

指先を握り、拳を作つては解き、『彼』は唐突に、指先をすり抜け

るもののスカスカの「なにか」が、このウロヤミの隅々までを満たした「くつき」であるということを、誰に教わったワケでもないのに認識しました。

『彼』は胸いっぱいに空氣を吸い込み、吐き出します。

その行為に私が「いやもつ」であるのだと、やはり『彼』はひとつでに理解しました。

けれども、『彼』は未だに自分がどうしてここにいるのか、それを理解することはできません。

『彼』は虚ひで空白で、まつわらひな認識は、まるで生まれたての赤ん坊のよつ。

幼い認識は、理解できないことを考へるといつことが無意味であるところじとを、漠然と判つてこました。

ですから『彼』は、難しいことはさておき、まず自分のカタチを確認してみることにしました。

先程から「くつき」を掘もつと動かしていた手を、顔の前にかざします。

折れそびに細い、白い手。

覚えがあつません。

続いて、地面を踏み締めてくる自分の足を見下ります。

折れそうに細い、白い足。

覚えがありません。

足から上に、じんじん視線を上げていきます。

壊れそうに頼りない、細い腰。

覚えがありません。

限りなく平坦で、筋肉もほとんどついていない胸。

覚えがありません。

なんとか首も確認しようと頭を下げますが、頭は首の続きでしたので、頭を下げる見えません。

それなら顔でも確認しようと、『彼』は困ったことに『気が付きました。

『彼』は自分の顔を見る方法なんて、知らなかつたのです。

その方法を考えようとしても、そもそもどんな手立てがあるのかさえ知らなかつたので、考える」とすらできません。

『彼』はますます困りました。

自分がどのようにして自分のカタチを確認したのか、それをじつても知りたかつたからです。

頭を向ければカタチが判つたので、自分の顔にその理由があるのは間違いないのです。

けれども、やはり『彼』は、自分の顔を確認する手段を持ちません。ですから『彼』は、どうにか自分の顔を確認できないかと、無意識に足をひょい、と踏み出しました。

やべ。

草を踏み締める音と、足の裏に生じた、異なる感触。

『彼』は驚き、踏み出した足を元の位置へと戻します。

音はせず、感触も大まかには同じでしたが、微妙に草や土の触れる感覚が違います。

どのぐらい逡巡したのか、『彼』はもう一度足を上げ、また一歩踏み出してみました。

やべ。

草を踏み締める音と、足の裏に生じる、異なる感触。

『彼』も今度は驚きませんでした。

そしてもう一歩、もう一歩と、足を交互に踏み出します。

やべ。やべ。やべ。やべ。やべ。

そして『彼』は、その行為が「あるべ」と「つゝ」とあるのだと、意識もせずに理解しました。

自分が歩きまわるのだと理解すると、『彼』は無性に嬉しくなりました。

同時に、『彼』は自分が「うれしい」と感じて「こと」も、理解しました。

ますます嬉しくなった『彼』は、やくそくと草を踏み締め搔き分け、辺りを方々歩き回ってみたのでした。

ところが、暫く歩いていると、初めは面白かった「あるべ」という行為も、なんだか少しすつ面白くなくなっていました。

なんだか体が重く、歩くのが大変になってきたのです。

『彼』はそれが「つかれた」状態であるということを、なんとなく理解しました。

それに、足の裏がなんだかズキズキしたのです。

その感覚が「いたい」ということなのだとすぐに理解して、『彼』は自分の足の裏を確認してみました。

足の裏は、歩いたときに木の葉や木の根や木の枝などで傷付けたものか、あちこち破れて赤いものが滲んでいます。

破れた裂け目が「きず」、滲んだ赤色が「ひ」であることを、『彼』は理解します。

「ああ」「が」「だれ」「お」「が」「でれば」「いたい」ということ。

『彼』は続けて、そのことを学習したのです。

学んだばかりの足の痛みに、『彼』はすっかり歩く気をなくして、地面に座り込んでしまいました。

足の傷は浅いものの、数が多く、とても真っ当に歩けるような状態ではなかった、といつのも座り込んだ理由の一つでした。

とはいって、傷が癒えるまでずっとじっとして座っているワケにもいきません。

たとえ一旦は傷が癒えたとしても、歩き出したらすぐにはまた、新しい傷がたくさんできるだろうことは疑いようもありません。

『彼』もそれには気付いたようで、どうにか傷を作らず歩ける方法はないものだろうかと考えました。

しかしながら、それは自分の顔を確認する手段さえも知らない『彼』にしてみれば、やはり考えることややでできないような難問なのです。

『彼』は困りました。

顔が確認できなかつたときより、更に一層困りました。

歩けなければ食べ物も探せません。

今のところ『彼』は、自分がものを食べないと生きていられないといふことを、まるで知らない様子でしたが、それに気付くのも時間の問題です。

動けなくなってしまったことに困って困り抜いていた『彼』はふと草を踏む、やくわくといつ音を耳にしました。

『彼』にはそれがどうことかは判らない様子でしたが、何か今までとは少し違つとことだけは理解していました。

やくわく、やくわく。やくわく、やくわく。

やく。

「誰かいるの？」

がさつ。

繁みを搔き分けて、ウロヤマリの奥から姿を現したのは、『彼』と同じぐりこの背丈の、黒い髪と黒い瞳を持った女の子。

『彼』は少なからず驚きましたし、彼女もどうやら驚いた様子でした。

「どうしたの、こんなところで。皮も纏わらず、足も血だらけ。彼方もしかして困っているかしら？」

眼をくらくらさせながら、女の子は『彼』の顔を覗き込みます。

『彼』はとこえ、動転してしまってこるので、反応ひとつ返さ

すに、ただ黙つて女の子の顔を見返すだけでした。

女の子の顔には、「め」があつて、「はな」もあつて、何よりも驚いたのは、音を発する「くち」があつたということです。

『彼』の視線を受けて、女の子は少しだけ居心地悪そうに体をもじつかせ、もう一度『彼』に声をかけてきました。

「あのね、私はクロイキ。森の樹たちが彼方のことを教えてくれたの。困つて『いの』なら手助けぐらにはできるけど、困つて『いの』のかじりが判らなかつたからです。

『彼』は答えません。

と、いつより、答えられなかつたのです。

女の子が「いの」を使って「はなし」をしようとしていることは理解したのですが、『彼』にはそうした場合に、どう対応したもののかが判らなかつたからです。

なおも黙つたままの『彼』に対し、女の子は別段気分を害した様子こそありませんでしたが、ひたすらに居心地が悪そうに体をもじつかせていました。

「あのね・・・わたし、クロイキなんだけど。彼方の名前を教えてもらえないかしら?」

彼方を何て呼べばいいのか判らないわ、と言つて、女の子は『彼』の顔を凝視しました。

「あ　　う、」

見つめられたことこたじろいだ『彼』は、喉の奥からかすかに声を洩らしました。

そして声を出したところの事実に、『彼』は物凄く驚いたようでした。

やつ、『彼』はそのときよつやく、自分にも「くへ」があり、自分でも「いとば」を話せるとこいつとを、理解したのです。

「いとば」。

そう、「いとば」です。

女の子と意思を通じ合わせたいのなら、なにかしら「いとば」を発する必要があります。

けれども、『彼』は「いとば」という概念を理解したばかりで、どうこう言葉があるのかはよく判りません。

『彼』は女の子が何を言っているのかは判るのですが、それに応える方法が判らなかったのです。

女の子が涙れを切らしたように、『彼』に向かって話しかけようとした刹那。

「あ　　お、『なんなのい』」

『彼』がよつやく「いとば」をつむぎ出したのでした。

「あ、『おんなの』』『せ』『へ』『かっこせ』。『せ』『せ』、『せ

く』『せ』『』

やつとのことで会話が成立するかと思えたのですが、『彼』の言葉は『尻すぼみ』にどんどんと小さくなり、やがて完全に沈黙してしまったのでした。

『彼』は今まで考えもしなかったのです。

自分の「なまえ」がなんなのか、なんて。

思い出せても考えようとも、「なまえ」の概念など先程理解したばかりです。

そんな『彼』に、名前なんて思いだせるハズもなかつたのです。

そして結局黙り込んでしまつた『彼』を困ったように見つめて、女の子はやっぱり無言のまま立ち尽くすばかり。

そうやつて随分と長い時間立ち尽くしていた『彼』でしたが、結局名前なんて思い出せるハズもなく、やっぱり『彼』も、困ったように女の子を見つめ返しました。

女の子は、『彼』が困り果てているのを察してくれたのでしょう、ただ立ち尽くす『彼』に優しい聲音で語り掛けます。

「自分の存在<sup>なまえ</sup>がわからない? それとも会話<sup>じ会話</sup>がわからないのかしら?」

『彼』はもう問われてもしばらぐの間、まるで返事ができなかつた

のですが、女の子の優しい顔を見つめっこり、気分が少しすつ落ち着いてきた様子でした。

「あ・・・。『まぐ』『は』、『なまえ』『を』『しらなー』・・・」

めいやく『彼』が自分の中から搾り出したその言葉を聞いて、女の子は怪訝な顔をします。

「自分の起源を識らない?・・・へえ、そういう物もいるのねえ。  
とても珍しいわ・・・」

そう言つて、女の子はしげしげと『彼』を見つめ、やがてその様子に何か思つところがあつたのでしょう、徐に『彼』の手を引きました。

「色々なことを教えてあげましょ。だからこいつへこらつしゃい。  
・・・森の樹たちは、きっと彼方を歓迎するわ」

女の子は優しく微笑みながら、『彼』の手を引いて歩き出しました。

『彼』は少しだけ戸惑いましたが、女の子のことを疑うことはまだ知らなかつたので、そのままますますと女の子に従います。

歩くたびに『彼』の足は酷く痛みましたが、痛みに堪り兼ねて立ち止まるたび、女の子が『彼』の傷付いた足を撫で、そのたびに『彼』の痛みは和らぎました。

そうした小休止を十回も繰り返した頃でしょつか、やがて視界が開け、まるで丘のような場所が目の前に広がります。

なだらかな丘の上にはとてもとても大きな大きな一本の樹。

そしてその後ろには、たくさんの樹がずらりと肩を並べて立っていました。

『彼』はその「や」と「もり」を認め、それを理解します。

『彼』の手を引いていた女の子は、そんな『彼』の様子を眺めて、興味深そうな顔をしましたが、何も訊くことなく歩き続けます。

ざくざくと傷む足に、『彼』の細い膝は今にも崩れそうなほどだつたのですが、今度はどりしてか、女の子に立ち止まる様子はありません。

痛む足をそのままに、なだらかな丘をゆっくりと『彼』と女の子は上ります。

やがて辿り着いたその場所は、大きな大きな一本の樹の根元。

真っ黒で真っ黒なウロが口を開けた、とてもやさしこ樹の下でした。

「ああ、着いたわよ。痛かったでしょう、足を見せて御覧なさい」

優しく掛けられたその声に、とつとつ『彼』も耐え切れなくなつて、その場にぺたんと座り込んでしまいました。

傷だらけの『彼』の足を手に取り、その状態を確認すると、女の子はとても広いウロの中にじんじんと潜り込み、中から何かを持つて出できます。

「少し痛むかもしれないけれど、我慢してね。」

そう言いながら、女の子は『彼』の足をもう一度手に取って、あちこち開いた傷口に、何かどうつとして粘ついた、蜜のようなものを塗りたくりました。

「・・・・・う

言われた通り、塗られた直後は酷く痛み、『彼』は咽喉の奥から呻き声を洩らしました。

けれども、少し時間を置くと、その痛みは熱に変わり、痛みは嘘のように引いていきます。

足がじんじんと火照りましたが、痛みはもうほとんど跡形もありません。

「どう? 効いたでしょう。キズをふさぐには、こいつするのが一番なの

女の子は優しく笑つて、『彼』をウロの中へと招き入れます。

ウロの中はとても広く、もしも一人で寝転がつても充分すぎるくらいの広さがあって、天井の高さはそれよりももうとずうつありました。

そして、何処からかほんのりと香る甘いにおい。

そのにおいを嗅いだ瞬間、『彼』は突然、まるで自分の内側が「う

そつとなくなつてしまつたかのよつな氣分になつてしまつました。

そつ、それは初めて意識した「くつぶく」です。

「くつぶく」とこつ」と理解した『彼』でしたが、それをどうすれば収められるのかは、まるでわつぱり判りません。

困り果てた『彼』が、ペニペニに空いたお腹を押されたとき、不意にお腹が盛大な音を立てて鳴りました。

自分の体の内側から響いたその奇怪な音に、『彼』は一瞬飛び上がりんばかりに驚いて、危つて尻餅をついてしまつといひました。

もちろん、ソレがどうこつ意味なのかはすぐ理解したので、それ以上慌てることもなかつたのですけれど。

そんな『彼』の様子を見ていた女の子は、クスクスと声を立てて笑い、『彼』に向けて何かを差し出します。

「はい、どうぞ。これなめを食べればお腹は随分と落ち着くハズよ」

そつと差し出されたそれは、ビタヤウチニヒツキ足に塗り込まれた蜜のよつなもの。

おずおずと受け取ったそれを、『彼』は誘われるまことに口を近付け、ペロリと舐めてみました。

途端に口の中に広がる色々な感覚に、『彼』は心底驚きました。

ソレは「ああく」「ここ」「ここ」「おこ」「で」「もつと」「たべたい」

ところへ。

一言で表すなら、それは「おこしこ」という感覚だとこいつひとを、『彼』はすぐに理解しました。

それを理解してしまえば、あとはもう食い飛べすぐだけです。

たくさんあったハズの蜜をぺろつと平らげ、彼は穏やかになつたお腹を軽くさすります。

「もの」「を」「たべて」「おなか」「が」「ふくれぬ」とこいつ」と。

『彼』は「たべる」とこいつとを理解して、このとき初めて、自分は食べないといけない、とこいつとをも理解したのでした。

『彼』のお腹がふくれたのを見届けた女の子は、それから色々なことを語り掛けました。

呼吸すること。歩くこと。嬉しさこと。疲れること。痛いこと。話すこと。食べること。覚えたそれらの他に、たくさんたくさん女の子は教えてくれました。

それは本当にたくさんで、とてもとても長い時間を掛けて、『彼』はたくさんのことひとつひとつ理解していくました。

もうびわぐらこの時間が流れたのでしょうか。

その時間の経過といつ概念も教わった『彼』は、随分と長いこと色々なことを教えてもらつたのだとこいつとを意識します。

もつ女の子 クロイキさん、あらかた教えられる」とは教えてしまつたらしく、今度は色々なことを訊いてきました。

名前のこと。何処から来たのかと云ふこと。いつからいたのかといふこと。何をしていたのかといふこと。何をしたかったのかといふこと。そして 何をしなくてはいけないのかといふこと。

何も應えられなかつた『彼』でしたが、どうしてか最後のその問い合わせにだけは、何か漠然とした感覚があつたのです。

「ぼくは きっと、ぼくはぼくをさがしている。もうひとつのぼくに あわなくちゃいけない」

そう応えて、『彼』はウロの中で勢いよく立ち上りました。

口に出した途端、居てもたつてもいられないような焦燥が、まだまだ未熟な『彼』の認識をちくちくと刺激し始めたのです。

そんな『彼』の様子を見て、興味深そうな顔をしていたクロイキさんが、徐に口を開きます。

「もう一人の、ぼく? それはどう云つて意味なのかしら・・・」

「もうひとりのぼく。ぼくはきっとふたりいるんだ。ぼくはきっとひとりじゃぜんぜんたりてないんだ」

使い慣れない言葉でたゞたゞしく云つて、『彼』は困つたようにクロイキさんを見つめました。

いよいよ強くなる得体の知れない焦りがあるにも関わらず、『彼』には一体どうしたらいいのか、皆目判らなかつたのです。

クロイキさんはそれをどうやら理解した様子で、軽くうつむいて思考するような素振りを見せました。

「・・・。うん、そうだね、それじゃあ私が、一緒にもう一人の彼方を探してあげる。必ず見つけてあげるから、そんなに困らないでほんのりと笑つて、クロイキさんは『彼』の頭を優しく撫でました。

「それじゃあ・・・何処へ行けば会えるかとか、そういうことは判るの?」

クロイキさんはそう訊いてきましたが、もちろん『彼』はそんなことなど判りません。

黙つて首を振るだけの『彼』を見て、何か納得したように頷いて、クロイキさんはウロの中で立ち上りました。

「なら、とにかく探してみるしかないでしちゃね。・・・うん、私も何処かへ出かけるのは初めてだけれど、きっとどうにかなるでしょう

「う

そつ言つて、クロイキさんは『彼』の華奢な手を取つて、優しい力で引きました。

「さあ、行きましょう。もう一人の彼方を探しに

「・・・うん。ありがとう、くろこさん

「いいのよ。私も、この森を離れたことなんてなかつたんだもの。きっと外は広くて素晴らしいわ。広い世界を、私だって見てみたい」

憧れるような瞳でクロイキさんは笑いて、『彼』の手を引いたままゆっくりとウロの中から這い出ます。

『彼』も引かれるままにウロの中から這い出で、引かれるままに歩き出します。

と、其処でクロイキさんは大事なことに気が付いたらしく、『彼』の手を取つたままぴたりとその場に立ち止まりました。

「・・・そうね。彼方がもう一人の彼方を探すとこうのなら私は彼方に付いていく。もう一人の彼方が必要なのはあなた。だから、その道は彼方が選びましょ」

そう言つて、クロイキさんは引いた手を前に差し出して、『彼』を自分の前に立たせます。

『彼』は少しだけ戸惑つた様子でしたが、クロイキさんはもう一度促されると、おずおずと最初の一歩を踏み出しました。

クロイキさんは優しく笑います。それでいいの、と。

『彼』はその意思に頷き返して、ゆっくつゆっくつ自分の道を歩き出します。

まっくらまっくらのウロヤマリの世界で、『彼』は漸く自分が道を選ぶことができたのでした。

『彼』の歩みは最初はゆっくり、次第にどんどん足早に、いつしか懐かしく再也不思つほどのなつたたくさんの黒い樹たちの森を抜け、クロイキさんに引かれて歩いた優しい丘を越え、自分が始まった場所さえも通り越して、見たことのない新しい景色にまで進んでいます。

いつの間にか繋がつていた手と手は離れ、ひとりとひとりは同じ方向を田指して歩き、足が痛めば体を休め、お腹が空いたら食べ物を探して食べました。

そつして幾つもの丘を越え、幾つもの森を抜け、幾つものウロヤミを搔き分け進んだその先で、ひとりとひとりは立ち止まりました。

クロイキさんの様子が、なんだかおかしく思えたからです。

「……へんなこれかん? じうしたの、わからんのがおもへくなつてしまつたみたい」

「判らない。判らないけど、なんだか身体が苦しいの」

「へんな……いたく、へんなの」

「痛くはないの。痛くはないけど、苦しいの」

どうして苦しいのか、そして何がおかしいのかは、『彼』にもクロイキさんにも判つませんでした。

ただ、その苦しさは、歩けば歩くほど、懐かしくあの森から離れれば離れるほど、どんどんどんどん募つてこくらしこじとせ、じゅせ

う一人にも理解できたのです。

『彼』は何故か、とても心細い気持ちになりました。

クロイキさんの苦しそうな様子を見ていると、『彼』の足取りは重く、そして胸の内側にはウロヤミが凝ったように、ずつしりと厭な気持ちが湧いてきます。

けれど、クロイキさんはそんな様子の『彼』を見て、心苦しく思つてしまつたのでしょう。

いつしか苦しいのを我慢して、にっこりと笑つよになつたのです。

「大丈夫。きつと今まで歩いたことのないほどたくさん歩いたから、それでカラダが傷んだだけよ。少し休めば良くなるわ」

そう言って、クロイキさんは何度も立ち止まって、その度にゆっくり身体を休めました。

けれども、その苦しさは、休めど休めど消えるビリビリが強くなり、いつしか彼女は笑うことさえできなくなりました。

とつとつにあの懐かしい森は見えません。

優しいやさしいあの丘の記憶も、今は遠いウロヤミのかなた。

それでも歩き続けた道の先、とつとつ彼女は力尽きました。

『彼』がクロイキさんの身体を慮り、後ろにいるはずの彼女を振り向いたとき。

『彼』の後ろには誰の姿もあつませんでした。

道を見渡せば、其処はこいつの間いか細く伸びた崖の上。

辺つは渦巻へ一匁のウロヤリだけ。他には何も見えません。

「・・・へりこめさん?」

『彼』の言葉は、誰のとへりくも聞あせん。

ゆりへつゆりへつと渦巻へウロヤリのせに、やうやうふわふわと消えてしまひだけ。

「へりこめさん?」

『彼』は幾度も幾度も振り返り。

歩み進んできたその道は、もうあの壊かしい森にじみ繋がつてはおらず。

そして詰向、『彼』はそのウロヤリ、誰の姿も見付かることがで  
きなかったのでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7315f/>

---

虚闇幻想郷

2010年10月9日01時19分発行